

学 位 論 文 要 旨

氏 名 藤 田 雅 也

題 目 立体の素材や形状が触る行為に与える影響の研究

本研究では、今日の子供が触る行為を通して、どのように目の前の世界を素材や形状等の造形要素として認識しているのかということを、美術教育の視座から明らかにすることを目的としている。そのために、立体の素材や形状が触る行為に与える影響について、乳幼児・児童・生徒・大学生の触る行為の実態に基づきながら考察する。なぜなら、日常生活の中に存在する素材や形状の特性を理解するには、触覚等の諸感覚の働きが必要であり、美術教育における触る行為について追究していくことは、表現活動や鑑賞活動の環境構成や授業展開等を検討する際の新たな視点を含んでいると考えたからである。そして、本研究では、実態に基づく検証を行うために、第2章から第5章までの各章で論じる四つの調査を実施し、その結果について考察した。

第1章では、本研究に通底する触る行為についての概念や理論的背景について考察した。先行文献研究を基に、本論での研究の範囲とする能動的触覚の働き等について整理しつつ述べた。その上で、目の前の世界を認識していく上で触る行為に着目することの価値について考察した。

第2章では、第1章での理論研究を基に、幼児の触る行為による素材への関わり方の実態について把握するための調査を行い、結果に基づき検討した。調査では、異なる重量や質感を持つ7種類の素材に幼児が出会う場を設定し、幼児の行為及び発話を動画記録した。そして、幼児の行為や発話の内容等を抽出・集計し、素材への関わり方、触り方について分析した。その結果、年齢と共に異なる行為や発話があることや、重さや硬さ等に気づく際には特有の行為が見られること、素材ごとに温度と行為の関係性が見出せること、光沢のある素材を積極的に触る傾向があること等が明らかになった。

第3章では、第2章の調査で課題となった、素材の触感や重さ等を確かめる際の、特有の触り方や観察方法の傾向について、知識と経験による視点から考察した。そのために、視覚（見る行為）と触覚（触る行為）による観察が表現行為に与える影響について検証することを目的とした調査を実施した。調査では、見たり触ったりした経験がある「知っているもの」と、見たり触ったりした経験がない「知らないもの」を、「見て観察」（視覚）、「触って観察」（触覚）、「見て触って観察」（視覚と触覚）の三つの方法で観察しながら、感じたことを粘土で表現する中学生の活動を調査し、その傾向について考察した。その結果、触覚による

観察ではモチーフを再現しようとする意識は高くなり、視覚による観察では新たなイメージを表現しようとする意識が高くなる傾向があること等が明らかとなった。

第4章では、触る対象の形状によって生じるアフォーダンスや、触る対象の配置とシェードネグレクト効果の関係性について、先行研究を基に整理した。その上で、触り方や触りたいと感じる形状を検証するための調査を実施し、形状によって誘発される触る行為の傾向について検討した。調査では、乳幼児・小学生・中学生・大学生の計802名が異なる形状の立体物に出会う場を設定し、行為と発話を個別に動画記録し、「触った時間」、「触った回数」、「触った順番」、「行為の出現」等の結果を六つの形状ごとに集計し、形状によって促される行為の傾向について考察した。その結果、すべての年齢・学年において、どのような配置であったとしても「球」の形状を触る傾向が高く、発話やワークシートの分析から、触りたいと感じる形状も「球」であることが分かった。さらに、「球」は《にぎる》、「円錐」・「四角錐」は《つまむ》等、形状によって誘発される行為は異なり、形状が触り方に影響を及ぼしていることが明らかとなった。

第5章では、これまでの調査に基づく考察を基に、粘土を触る行為とつくり始めの形状についての調査を行い、触る行為と造形活動の関係性について分析した。使う粘土の量や形状を制作者が自己決定するという活動を取り入れることによって、その後の造形活動に対する意欲や生じる行為を検討した。その結果、触りたいと感じる粘土の形状は、表面が滑らかであり、球や直方体等の幾何学的な形状の粘土を触りたいと感じる傾向が強いことが明らかとなった。また、粘土を使った造形活動では、自分が使いたいと感じる粘土の量を決定し、触りたいと感じる形状に変えるという導入を取り入れることによって、すべての粘土を使い切って表現しようとする傾向が強いことも確認できた。

終章では、これまでの調査及び論述を概観し、一連の検討から子供が触る行為と立体の素材や形状との関係を、以下の3点から総括的に考察し、結論とした。

- ① 球に代表されるように、年齢や成長に関わらず、視覚的な情報から触りたいと考える傾向の強い形状等の要素の存在が明らかになった。
- ② 触り方や接し方の違いによって導き出される対象物への感情や感覚が、その人にとっての形状や素材等の性質となり、その性質に応じて、次に触る方法が思考され、再び別の触り方を試みることで、新たな性質を導き出す行為を繰り返していることが明らかになった。
- ③ 探索行為としての触るには、二種類の「触る」があることが分かった。一つ目は、自分の知識や経験と結び付けて対象の性質を確認するための「触る」である。二つ目は、まだ知らないものと関わり、新たな情報を生成するための「触る」である。

以上の結論から、能動的触覚の働きによって、自分の外の世界を探索すると同時に、自分の身体を発見し、自分の内面を探索することが浮上した。そして、能動的触覚を伴う表現活動が、自己の内面にある知識や経験と、外側にある新たな知見を融合させて、独自の価値を形成する一助となり得るという教育的意義を指摘した。